

「あなたは、今、どこにいるのか」

マルコによる福音書 5章 1－20節

森島 牧人 牧師

私たち人間には、終わりに必ず行かなくてはならないと知りながら、視線の外に置いてある場所があります。それは墓場です。今日の聖書は「一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた霊にとりつかれた人が墓場からやって来た。」(マルコ 5：1－2) という記述から始まります。

聖書の時代のユダヤの墓は大きな岩をくり抜いた横穴形式のもので、岩には無数の穴が開けられていました。生や命と切り離され、死者のみが存在するその暗黒の場所にその男は住んでいました。聖書には「彼は昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で自分を打ちたたいたりしていた。」(同 5：5) とあります。彼自身、自分がこのような有り様になったのは何故なのか、立ち向かうべき相手は誰なのかが分からず、叫び続け、自身を痛め続けていたのです。

実は、彼には彼の知らない二つの誤りがありました。その一つは、自分の知らないところでの彼への神の配慮を無視したことでした。自分の力で人生を切り開き、目標を達成したと思い込んでいた彼は、自分の成功の陰に神の配慮のあったことを考えることがなかったのです。二つ目は、自分の弱さを知らないことでありました。好きなことだけをして自分のためだけに生きて来た彼は、自身を過信し、自分が神に頼らざるを得ない弱い人間であることに気付いていなかったのです。この二つの誤りによって、彼の人生は壁にぶつかり、事業に失敗して築いて来たもののすべてを失ったのです。

すべてを失ったはずの彼がそれでもなお固持していたもの、それはプライドでした。自身の挫折を容認できなかった彼は、敗北の理由を正視することなく、生きる希望を失くし、狂ったような姿でそこにいたのです。詩篇 51：19 に「神の求めるいけにえは打ち碎かれた霊。打ち碎かれ悔いる心を 神よ、あなたは侮られません。」とあるように神が望まれるのはへりくだって神を呼ぶ姿勢でした。しかし、彼のプライドは彼にそれをさせなかったのです。ここに重要な罪の問題を見ることが出来ます。

そのような男が主イエスの姿を見て走り寄る・・・これは不思議な場面です。多分「主イエスがこの地に来られた」と言う声が彼にも聞こえたのでしょう。「人間を悪霊すなわち罪から解放する人がついに来た」と思った彼は、すぐに立ち上がり、神の国に向かって走ったのです。主イエスはこの男の前にとどまり、「汚れた霊、この人から出て行け」と言って悪霊を追い出し(同 5：8)、さらに、「君は誰なのだ。そして、今、どこにいるのか」とお尋ねになります。この「どこにいるのか」との問い、これは罪を犯して隠れていたアダムとイブに対しての神の御言葉でした。そこには「わたしのところへ戻りなさい」との意味があったのです。主によって砕かれ、汚れた霊すなわち罪から解放された男は家に帰り、イエスのことを言い広め、人々は皆驚いたと、この出来事は結ばれています。

辺境の地に、挫折の時に、「どこにいるのか」と呼び掛けてくださる主。私たちも打ち砕かれ悔いる心をもって、「マラナ・タ (主よ、来たりませ)」と、主に呼びかける者でありたいと願うものです。